

中務集注釈（二〇）

古今集歌人伊勢の娘、中務の家集を取り上げ、注釈を試みる。本紀要五八号「中務集注釈（二）」以来、六三号「中務集注釈（六）」に至る六回において、中務集二類本、冷泉家時雨亭文庫蔵資経本二九八首の注釈の試みを終了した。さらに六四号「中務集注釈（七）」及び六五号「中務集注釈（八）」において、資経本に収載されず、西本願寺蔵三十六人集、歌仙家集本および旧前田本のみが存在する歌の注釈を行った。また前号「中務集注釈（九）」においては、「中務集注釈（二）」及び「中務集注釈（二）」が、研究会で問題となった歌を抜粋した注釈であったため、そこで省略した歌を改めて検討し補遺として掲載した。本号はその続きであり、補遺も本号「中務集注釈（二〇）」にて完結する。

「中務集注釈（二）」（九）」について、ご教示を賜った皆様に深く感謝申し上げます。

各歌の文責を次に示す。三九・四〇・四二・七三・七六・七七（加藤）、四四・四六・四七・七九・八二（斎藤）、四九・五二・五四・八七・八八・八九（高野瀬）五五・五八・六二・九〇・九二・九三（森

高野晴代・高野瀬恵子・加藤裕子
森田直美・斎藤由紀子・曾和由記子
寶槻たまき

田）、六三・六五・六七（寶槻）、六八・七一・七二・八一・九六・九七・九八・一〇〇・一〇四・一〇五（曾和）。

凡例

一 本注釈は、資経本（冷泉家時雨亭文庫編『資経本私家集二』朝日新聞社二〇〇一年所収）を底本とする。
二 本文の校合に用いた本は、以下の通り（一）内は、異同を掲出す際の略称）。

宮内庁書陵蔵本（510・12）（御）※原稿中では、御所本と称す。

西本願寺本（西）

前田家旧蔵 現出光美術館蔵 伝西行筆本（前）

奈良女子大学蔵歌仙家集本（歌）

三 和歌本文は読解の便のため、適宜仮名を漢字に、漢字を仮名に改めた。また、詞書内には必要に応じて句読点を施している。校訂した

箇所や仮名漢字表記を改めた箇所は、右にルビで底本での表記を示した。

四 底本を校合本によって校訂した箇所は、「語釈」もしくは、「補説」に、その理由と共に明記した。

三九番歌

花惜しむ、帰る雁鳴く

とどまらぬ花を惜しむにいとどしく帰る雁さへ鳴きわたるかな

〔異同〕 ○花をしむかへる↓春を、しむまにかへるかりなく(西)、花おしむにかへる雁なく(歌)、はなを、むところにかりなく(前) ○花を、しむに↓はなおしむまに(前) ○なきわたるかな↓なきわたるらん(西・前)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○帰る雁鳴く 底本は「花をしむかへる」。これでは意味が通じないため、他本を参照し「かりなく」が脱したものと見て補った。○とどまらぬ花を惜しむに 散り行く花はいくら惜しんでもとどまることがない。「とどむべきものとはなしにはかなくも散る花ごとにたぐふ心か」(古今・春下・一三三 躬恒)。○いとどしく「いとどし」は、いつそう、はなはだしい意。「色深く染めし袂のいとどしく涙にさへも濃さまさるかな」(後撰・恋一・五八七 師輔)。ここでは、「鳴きわたるかな」にかかり、散ってゆく花を惜しんでいると、北へ帰る雁の声が聞こえてきて、ますます惜しむ気持ち募るのである。○帰る雁さへ「さへ」は、添加の副助詞。とどまらずに散ってゆく花に加えて帰る雁まで

も、の意。「月をだにあかずと思ひて寝ぬものをほととぎすさへ鳴きわたるかな」(貫之・三五)。

〔通釈〕 花を惜しむ、帰る雁が鳴く

とどまることなく散ってゆく花を惜しんでいると、帰る雁までが鳴いて飛んでゆき、ますます惜しむ気持ちを募らせる。

〔補説〕 散る花を惜しみ帰る雁を惜しんで行く春を惜しんでいる。帰雁と花を取り合わせた歌は「春霞立つを見捨ててゆく雁は花なき里に住みやならへる」(古今・春上・三二 伊勢)、「見れど飽かぬ花の盛りに帰る雁なほふるさとの春や恋しき」(拾遺・春・五五 よみ人しらず)など他にも見られるが、晩春の景として落花とともに詠まれた例は珍しい。屏風絵として見ても、帰雁と落花の取り合わせは特異である。村上朝月次屏風歌歌群の一首である。

四〇番歌

五月五日、田舎の家に女どもゐて、糸練り、菖蒲つけり

あやめ草手引きの糸を手にかけて長きひぐらし人ぞ恋しき

〔異同〕 ○ゐ中の家に↓ゐなかいへに(西・前・歌) ○ゐて↓いそく(歌) ○さうふつけり↓さうふつきたり(西)、さうふつけなとしたり(前)、さうふ、けり(歌) ○て引のいとを↓てひきのいと(西)、てひきの糸の(歌) ○てにかけて↓身にかけて(西)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○五月五日 端午の節会が行われた。○菖蒲つけり「菖蒲」は、端午の節会に邪気を払うものとして家の軒に挿したり、鬘(髪飾り)

や薬玉にして身に着けた。「内裏の御絵に、五月五日、菖蒲つけたる家／我が宿のつまにかかれるあやめ草山ほととぎす鳴く音絶えずは」(尊經閣文庫蔵元輔・一五七)、「…ほととぎす鳴くさつきにはあやめ草花橘を玉に貫きかづらにせむと…」(万葉・卷三・四二三 山前王)。「つけり」は、『元輔集』の例から菖蒲を家の軒に付けているとも解し得るが、糸を繰っていることから糸で貫いて髪に付けている意に解すべきか。○あやめ草 どこにかかるのか明確でない。「あやめ草に結びつける手引きの糸を」と言葉補って解した。○手引きの糸 手で引き出す糸。「夏引きの手引きの糸をくりかへしことしげくとも絶えむと思ふな」(古今・恋四・七〇三 よみ人しらず)。○手にかけて 手にかけて糸を繰り出している様。「手にかけてくる夏ごととにわぎもこが多くの糸を引きつけてけるかな」(東宮学士義忠歌合・七)。○長きひぐらし 夏の長い日を過ごし、一日中の意。一日を過ごす意の「くらし」に、一日中、朝から晩までの意の「ひぐらし」を重ねる。「たくなは夏のひぐらし恋しくてなどかく長き今日にかあるらむ」(麗花・九四・中務)、「つくづくと春のひぐらし降る雨は月見る秋のこちこそすれ」(寂然法師・一四)。こは、夏の長い日を過ごし、一日中あの人のことが恋しい意。

〔通釈〕 五月五日、田舎の家に女たちが座って、糸を繰り、菖蒲をついている

あやめ草に結びつける手引きの糸を手にかけて長い夏の日を過ごし、一日中あの人のことが恋しく思われる。

〔補説〕 三九番と同じ村上朝月次屏風歌歌群の中の一。画面には、田舎の家で女たちが糸を手で繰っている景が描かれていたか。画中の一人の女の立場で、糸を繰りながら一日中恋しい人のことを思う心の内を詠む。田舎の家で女たちが糸を繰っている景は、五月五日の画面としては

特異か。「五月、人家に菖蒲つき、女など出でゐたるところ／昨日までよそに思ひしあやめ草今日我が宿のつまと見るかな」(能宣・一三七)、「五月五日、人の家に菖蒲ふき、女どもほととぎすの声聞き待るところ／あやめ草ひきかけたるはほととぎすねをくらべにや我が宿に鳴く」(書陵部蔵(五一〇・一二)能宣・一二)。

四二番歌

田守る庵に臥せる人、鹿の食むを知らで寝たり

守りくる山田のいねにまどふ夜は夢とぞ鹿の鳴くも聞こゆる

〔異同〕 ○たまもるいをにふせる人↓田まもる人(西)、たまもるいへにひと(前)、田まもる家に(歌) ○しかのはむを↓むまのはむを(西)、し、のはむをも(歌) ○まどふ夜は↓すまふよは(西)、まどふには(前) ○なくもきこゆる↓ねをもなきける(西)、ねをはき、ける(前・歌)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○田守る庵 鳥獸から稲を守るために設けられた仮小屋。○山田 山あいの田。「山田もる秋のかりいほに置く露はいなおほせどりの涙なりけり」(古今・秋下・三〇六 忠岑)。○いねにまどふ夜は「いね」は、「稲」に寝ること、眠ることの意の「寝ね」を響かせる。「秋の田のかりそめ伏しもしてけるがいたづらいねを何に積ままし」(後撰・恋四・八四五 藤原成国)。「まどふ」は、思い乱れる、心乱れる意か。「稲」とのつながりがわかりにくいのが、稲を守ることと心を砕いている意に解した。○夢とぞ鹿の鳴くも聞こゆる 鹿が鳴く声をも夢の中のことと聞いて目を覚まさず、稲を食べられてしまったのである。「山里は

秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音に目をさましつつ」(古今・秋上・二一四 忠岑)。

〔通釈〕 田を守る庵に横になっている人が、鹿が稲を食べているのを知らずに眠っている

守ってきた山田の稲に心を砕き寝入ってしまった夜は、鹿が鳴く声も夢の中のことと聞こえてしまった。

〔補説〕 画面には、山田を守る庵に横たわる人物と、稲を食べている鹿が描かれていたと見られる。庵の中で稲を守る様を描いた屏風絵は、「田を守る庵あるところ／かりほにて日さへ経にけり秋風に早稲田かりがねはやも鳴かなむ」(貫之・一五三)、「延喜御時、月次御屏風の歌／刈りて干す山田の稲を干しわびて守るかりほに幾夜経ぬらむ」(拾遺・雑秋・一一二五 躬恒)、「田守る家に、人ゐたるところ／ともすればひきおどろかす小山田のひたすら寝ぬ秋の夜な夜な」(和泉式部・一一六)など他にも見られるが、鹿が稲を食べている様を描いた絵は特異と言えよう。庵の中の人物の立場に立って、絵に描かれた鹿を聴覚でとらえ、鹿の鳴く声を夢の中のことと聞いて目を覚まさなかつたために稲を鹿に食べられてしまった悔しさを詠んだ。画中人物の視点と絵を外側から見る視点が融合している。

四四番歌

師走の晦日

ほど近く来ぬなるものをいかなれば春にもあはで年の暮るらん

〔異同〕 しはすのつこもり↓十二月つこもり(西) 十月つこもり(前)

十二月つこもりに(歌)、くるらん↓こゆらん(西) ゆくらん(前・歌)

〔他出〕 万代和歌・冬・一五三六、新続古今・雑上・一八〇三

〔語釈〕 ○春にもあはで年の暮るらん 「春」と暮れていく「年」を擬人化している。前田家本、歌仙家集本および他出の歌集では五句を「ゆくらん」として、「来／行く」の対表現としている。年内立春の場合「年のうちに春はきにけりひととせをこそとやいはむことしとやいはむ」(古今・春・一 在原元方)ということにもなるが、そうでない年には暮れてゆく「年」は「新春」に会えない。当然のことを「いかなれば」と問うことで、春を待ちきれない気持ちを諧謔的に表現している。

〔通釈〕 師走の晦日

春が直ぐ近くまで来ているというのに、どうして会わずにこの年は暮れてゆくのでしょうか。

四六番歌

稲荷詣

稲荷山行き交ふ人をおきながらよそなる人をながめてぞ来る

〔校訂〕 底本「人を、きながら」を歌意により改めた。

〔異同〕 なし(底本・御所本のみ所収歌)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○稲荷山 山城国紀伊郡伏見の歌枕。「いなり」に願いが「意成る」を掛けて詠まれる。参詣が盛んな様子は『枕草子』「羨ましげなるもの」などにも見える。「いなりの山こゆるところ／いなりやまゆきかふ人はきみがよをひとつこころにいのりやはせぬ」(伊勢・二〇五)

○おきながら さしおいて。○よそなる人をながめてぞ来る 「よそなる人」は他所のひと。また、疎遠な人。特に、「わすれたる女のいへにあま宿りしてゐたるを、いまはここにかといひたり／古郷は雲ゐのほかに飛ぶ雁をよそなるひとのかへるとや見む」（元真・二〇五）のように、自分につれない異性の意で詠まれる例が散見する。ここでも、「よそなる人」はもの思いの対象であるため、疎遠になってしまった恋人を思つて参詣する画中の人物の視点から詠んだものとして解した。

〔通釈〕 稲荷詣で

願いが成るといふ稲荷山を歩き交う人々をさしおいて、ここにはいないつれない方のことを想つてやつてきました。

四七番歌

逢坂

待ちつらん都の人に逢坂の関まで来ぬと告げややらまし

〔異同〕 なし（底本・御所本のみの所収歌）

〔他出〕 金玉・七四、三十人撰・一二六、新撰朗詠・雑・六一〇、三十

六人撰・一四六、大鏡

〔語釈〕 ○逢坂 近江国の歌枕。万葉以来畿内と東国との境界として、東国へ赴く人との別れを惜しみ、また都へと迎え入れる場として詠まれてきた。当該歌は後者。

〔通釈〕 逢坂

待つてゐるだろう都の人に逢坂の関まで来たと告げてさしあげようかしら。

〔補説〕 絵を見ている人が、自分の立場で「都の人に教えてあげたい」と詠んだものであろう。

四九番歌

又

袖のうらの波吹きかへす浜風に雲の上まですずしからん

〔異同〕 又↓ナシ（西・前・歌）、はま風に↓はまかせは（西）あきかせは（前・歌）、くもの↓そらの（西）

〔他出〕 新古今一四九七、歌枕名寄六八六二

〔語釈〕 ○袖のうら 本来、衣の袖が裏まで涙に濡れるさまを「浦」にたとえて言う表現。やがて地名の意識で見られるようになり、平安後期には出羽国の歌枕とされた。当該歌では、「（袖の）浦」「波」「浜」が縁語関係。「逢ふことのなぎさはいつもかはらねどけさこそ袖のうらはことなれ」（兼澄・八三三）。○吹きかへす 平安和歌では中期頃から使われるようになった表現。当該歌はその早い例。万葉歌の影響か。「采女の袖吹きかへす明日香風都をとほみいたづらに吹く」（万葉・卷一・五一 志貴皇子）。○浜風 この歌語も、平安和歌では当該歌は比較的早い例。「いはで思ふ心ありそのはま風にたつしら浪のよるぞわびしき」（後撰・恋二・六八九 よみ人しらず）。

〔通釈〕 また、

袖の浦の波を吹き返す浜の風によって、雲の上、宮中までも涼しくあつてほしいものです。

〔補説〕 「北の宮の中に奉り給ふ御扇に」の詞書を持つ四八番歌と同じ

折の歌。「中務集注釈（二）」を参照。他系統本では「又」という詞書が無く、歌が二首並ぶ。前田本・歌仙本の三句が「秋風」とあるのは、四八番歌に「秋の風」とあるからであろう。当該歌の内容から、扇には浜辺の景等が描かれていたかと想像される。

五二番歌

近き山の桜
ちか

わが宿し春の山辺のつまなればほかの花とも思ほえぬかな

〔異同〕 ちかき山のさくら↓ちかき山さくら（前）ちかき山のまへ

（歌）、わかやとし↓わかやと、（前）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○つま 物の端の部分。○ほか ここは、空間的・平面的にある範囲や区画などの外側の場所の意か。

〔通釈〕 近い山の桜

私の家が春を迎えた山辺の端にあるので、山の桜はよその家の花とも思われぬことだ。

〔補説〕 五〇番歌から始まる「村上先帝御時の月次の御屏風」の歌。屏風絵には、桜咲く山のほとりに家が描かれていたのであろう。その家に住む人の気持ちになって詠んだもの。

五四番歌

五月五日

しるき香も匂ふなるかなあやめ草今日こそ玉に抜く日なりけれ

〔異同〕 しるきかも↓しるくかも（前）、にほふなる↓なほはなる（歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○しるき香も匂ふなるかな 明らかにそれとわかる香がおうことだよ。○あやめ草 サトイモ科の多年草である菖蒲。四〇番歌参照。○玉に抜く 玉のように緒に通ず。「ほととぎす待てど来鳴かずあやめ草玉にぬく日をいまだとほみか」（万葉・巻八・一四九四 大伴家持）。

〔通釈〕 五月五日

はつきりあやめ草とわかる香がおうことよ。今日こそはあやめ草を玉に抜き飾る日であることだ。

〔補説〕 これも五〇番歌からの屏風歌。菖蒲や薬玉の絵などがあつたものか。絵につける歌でありながら、嗅覚を前面に出した歌いぶりが面白い。

水がくれておふるさ月のあやめ草香をたづねてや人の引くらん

（古今六帖・一〇〇）

香をとめてとふ人あるをあやめ草あやしく駒のすさめざりける

（後拾遺・夏・二二〇 惠慶法師）

『古今六帖』の歌は貫之の作として『和歌童蒙抄』にも引かれているが、菖蒲の香を詠む歌は、中務と惠慶法師が詠んだほかに、平安後期から院政期に数首詠まれた程度で、多くはない。

五五番歌

泉

下したくぐる水みづに秋あきこそかよふらしむすぶ泉いづみの手てさへ涼すずしき

〔異同〕 詞書ナシ（歌）

〔他出〕 新千載・夏・三〇二、和漢朗詠・一六六、夫木・三六六五、三十人・一二八、三十六人・一四八、麗華・四三（詞書「まへのいづみを
見て、秋のちかければ」）、秋風・二二一（詞書「夏のうたの中に」）

〔語釈〕 ○手さへ涼しき 水を掬う手に感じられた涼しさから、「水底
には地上に先駆けて秋が通っているらしい」と想像する。

〔通釈〕 泉

地下を潜りぬける水に秋が通っているらしい。泉の水を掬う手にさ
え涼しさが感じられることだよ。

〔補説〕 「夏と秋と行きかふ空の通ひ路かたへすすしき風やふくらむ」
（古今・夏・一六八 躬恒）など、一般的には「秋の訪れを、風の涼しさ
によって感じ取る」と表現する歌が多い。それに対し、「泉の水の冷た
さから秋の近さを感じる」と表現したのが当該歌の特徴と言える。後代
にも比較的多く本歌取りされており、「涼風」に偏っていた晩夏から初
秋への季節の変わり目の表現に、広がりを与えた一首と位置づけられる。

泉、夜にいりて寒しといふ心をよみはべりける

さよふかき泉の水の音聞けばむすばぬ袖もすすしかりけり

（後拾遺・夏・二二三 源師賢）

新院にて人人歌つかうまつりけるに、泉の辺にすすむといふこ

とを

むすぶ手も涼しかりけりみな月の岩まの水に秋やかよへる

（後葉・一〇八 藤原公保）

五八番歌

冬ふゆこもりしける池いけ

こほりある池いけの汀みぎはは水鳥みづとりの羽風はかせに波なみもさはざりけり

〔異同〕 冬こもりしける↓冬こほりしたる（西）こほりたる（前）、い
け↓いへ（歌）

〔他出〕 続後撰・冬・五〇〇、太宰大貳資通卿家歌合・二三（作者／僧
そうすん）

〔語釈〕 ○冬こもりしける池 西本願寺本では「冬こほりしたる」、前
田本では「こほりたる」とある。和歌の内容から考えると「凍り」とあ
る方がしっくりくるが、ひとまず校訂はしなかった。○こほりある池の
汀は水鳥の 凍った池と水鳥を詠む場合、「飛びかよふ鴛の羽風の寒け
れば池の水ぞさえまさりける」（拾遺・冬・二二三 紀友則）、「池水に
むれるる鳥の羽風には葦間の氷さえやまさらむ」（堀河百首・一〇二二
師頼）など、羽風によって一層冷え込むと表現する歌が多い。「温度」
ではなく「音」や「波」に着目したところに、当該歌の特徴がある。

〔通釈〕 冬こもりしている池

氷が張っている池の汀は、水鳥の羽風にも波音をたてないのだった。

六二番歌

柳あり

くりかへし春は来ぬれど青柳の糸はふりずも見ゆる色かな

〔異同〕 くりかへし↓くりかへす (西) くりかへり (歌)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○くりかへし 「柳」「くる」「糸」は縁語。「あさみどりくる春ごと」にたえねども猶めづらしき青柳の糸 (元輔・四四)。○ふりずも見ゆる色かな 当該歌は、「朱雀院の若宮の御もぎの屏風」の一首。年を経てなお鮮やかな柳を詠み、若宮の行く末を予祝する。また、底本には、当該歌に近い詠みぶりの歌として、「くりかへす年へて見れど青柳の糸はふりせぬみどりなりけり」(二三九)がある。

〔通釈〕 柳がある

繰りかえし春はやって来るけれど、青柳の糸は古びることなく見える鮮やかな色であることよ。

六三番歌

路行く人郭公を聞く

うちはへて待ちつる道のほととぎすただ一声や聞きてやみなん

〔異同〕 路行人↓みちゆくに (西) みちゆくほとに (前) 道を行人 (歌)、

郭公を聞↓ほと、きすなく (前)、まちくる↓まちつる (西)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○うちはへて 長きに渡ってほととぎすの声を待つ。「わがせこが旅の衣をうちはへて待つ雁が音の今もなかなむ」(内裏歌合・九)。
○待ちつる道 底本「まちくるみち」。西本願寺本によって改めた。「夏衣たちてし日より郭公とく聞かんとぞ待ちわたりつる」(貫之・五二七)。○ただ一声や聞きてやみなん 「や」は疑問。ただ一声だけ聞いて鳴き止んでしまふのだろうか、の意。「奥山の峰を飛び越し初雁のはつかにだにも見でややみなん」(躬恒・三四五)。

〔通釈〕 道行く人がほととぎすの声を聞く

長い間ずっと待っていた道のほととぎすの声は、ただ一声聞いただけで鳴き止んでしまふのだろうか。

六五番歌

初雁旅人聞く

初雁の旅の空なる声聞けば我が身を置きてあはれなるかな

〔異同〕 初雁↓はつかりを (西・歌)、あはれなるかな↓あはれとそきく (西・前)

〔他出〕 万代・秋上・九〇一、玉葉・旅歌・一一五七

〔語釈〕 ○初雁 年の秋にはじめて渡ってくる雁。「初雁の我もそらなるほどなれば君も物うき旅にやあるらん」(後撰・離別・一三一五 よみ人しらず)。○旅の空なる 雁が旅先の空に居ることと、旅先での心もとない様を重ねる。「草枕我のみならぬ雁が音も旅の空にて鳴き渡るなり」(能宣・七六)。○我が身を置きて 旅の途中である自分よりも雁

を思いやる。「朝顔のつゆのわが身を置きながらまづ消えにける人ぞかなしき」(新勅撰・雑三・一二四七 賀茂重保)。○あはれなるかなし
みじみとあわれに思われることよ、の意。「秋風にあはれそへむと雲路
わけ羽ふりわけて雁は来にけり」(賀茂保憲女・八〇)。

〔通釈〕 初雁の声を旅人が聞く

初雁が旅の空で鳴いている声を聞くと、同じ旅人である我が身を差
し置いて、しみじみとあわれに思われることよ。

六七番歌

かぐら
神樂したる所

さ夜ふけて霜は置くとも山人の折れる榊は色も変はらじ

〔異同〕 ふけて↓ふかく(歌)、をれかさかきは↓をれるさかきの(西・
歌)、色も↓いろは(西・歌)

〔他出〕 雲葉・冬・八三三、新拾遺・神祇・一四四八

〔語釈〕 ○神樂したる所 神樂をしている所を詠んだ歌。舞人が神樂を
舞う際、採物として榊を手に持つ。「足曳の山の榊のときはなるかげに
さかゆる神のきねかも」(貫之・一八七)。○さ夜ふけて霜は置くとも
夜が更けて霜は置くとしても、の意。霜が置くと植物は変色してしま
うが、常緑樹である榊はその色が変わらない。「置く霜に色も変はらぬ榊
葉は香をやは人のとめて来つらん」(貫之・一七) ○山人 神聖な力を
持つ者として「逢坂を今朝越えくれば山人の我にくれたる山杖ぞこれ山
杖ぞこれ」(拾遺・神樂歌・五八〇) のように神樂歌に詠まれる。「山人
のたける庭火のおきあかしこゑごゑ遊ぶかみのやをとめ」(能宣・三

七)。○折れる榊は色も変はらじ 底本「をれかさかき」。歌意を汲ん
で、西本願寺本、歌仙本によって改めた。当該歌では榊が常緑樹である
ということだけでなく、神聖な力を持つ山人によって折られたことによ
り、霜が置いても色が変わらない、と詠むか。「ちはやぶる神垣山の榊
葉はしぐれに色も変はらざりけり」(躬恒・二六四)。

〔通釈〕 神樂をしている所

夜が更けて霜が置いても、神聖な力を持つ山人が折った榊は色も変
わらない。

六八番歌

たか
高き山に雪ふれる所

滝の糸もみなとちつらん吉野山雪の高さに音は変へつつ

〔異同〕 たかき山に↓たかやまに(西) たきに(前)、雪ふれる所↓ゆ
きふる(前)、たきのいとも↓たきのいとは(西・前・歌)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○滝の糸 滝の落ちる様子を糸に見立てた表現。「ながれよる
たきの糸こそよからしぬけど乱れておつる白玉」(貫之・六三三)。○と
ちつらん 今頃凍っているだろう、の意。「よしの山たきのいとさへと
ぢつれどはやくしりにしこゑはわすれず」(一条撰政・六七)。○吉野山
金峰山・水分山・高城山・青根が峰など広範囲にわたる山岳地帯の総
称。平安時代以降、雪深い地や桜の名所として歌に詠まれた。当該歌の
ように「吉野山・雪・滝」の三つを含む例は少ない。「ふりつみし雪は
みえねどよしのやまたきのおとこそ春はしりりけれ」(六条齋院歌合・

一)。○雪の高さに音を変へつつ 降り積もる雪の高さで、少しづつ凍って、音を変えながらの意。時間の経過による変化を表しているところに工夫がある。反対に凍った水が季節の経過によくなって溶けてゆくとした歌に「袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つ今日の風やとくらむ」(古今・春上・二 貫之)がある。

〔通釈〕 高い山に雪が降っている所を

吉野山は、今頃は滝の水もみな凍っているだろう。降り積もる雪の高さに、少しづつ凍っては音を変えながら。

七一 番歌

又、異屏風、たかうな抜く所

土分くる春きてみれば呉竹のこもれるよの数も知られず

〔異同〕 詞書↓たかうなほるところ(西・前) たかうなおる所(歌)、春までみれば↓はきてみては(西) はるきてみれば(前) 春にてみれば(歌)、よ、の↓はるの(西・前)、かすもしられぬ↓よともしられぬ(西) ほともしられぬ(前)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○異御屏風 別の御屏風。七十二番歌の他出によると、『新勅撰和歌集』入集歌(二五番)の詞書には「天曆御時屏風」とある。歌の内容から賀の屏風と考えられる。○たかうな 筍のこと。「竹の葉に散りかからなむ梅の花雪の中のも春と見ゆべく」(伊勢・六三)。○土分くる 筍が土を分けて生えてくる様。「土分くる」は他例が見出せない表現。○春きてみれば 底本「はるまでみれば」。時間を限定する「春ま

で」では不自然なため前田家本によって校訂した。「春きてぞ人もとひける山ざとは花こそやどのあるじなりけれ」(拾遺・雑春・一〇一五 公任)。○呉竹 呉から渡来した竹で、丈低く、節が多く葉の細い竹。内裏の清涼殿東庭に、河竹に対して北側仁寿殿寄りに植えられているものが有名。「よ(代・世・夜)」や「節」に掛かる枕詞として用いられることが多い。「君がためうつつしてうくるくれ竹に千代もこもれる心地こそすれ」(後撰・慶賀・一三三三 清正)。○よよの数もしられず 「よよ」は竹の「節」と「世」の掛詞。屏風の持ち主の行く末を祝う。「我が宿に生ひたる竹の葉をしげみ数も知られずいくよなるらむ」(元輔・十六)。

〔通釈〕 また、別の御屏風に、筍を抜く所

筍が土を分けて生える春がきて見ると、呉竹にこもっているたくさん節の数も知ることができないように、あなた様の世々の数も数え尽くせません。

七二 番歌

柳

吹く風に乱れぬ岸の青柳はいとど浪さへよればなりけり

〔異同〕 詞書↓ナシ(西・前)、ふくかせに↓吹風の(歌)、みたれぬ↓みたれる、よれば↓をれば(歌)

〔他出〕 新勅撰・春上・二五

〔語釈〕 ○吹く風に乱れぬ 青柳は古今集時代から「春ごとにたえせものは青柳の風にみだるる糸にぞありける」(貫之・二八三)や「めにみ

えて風はふくとも青柳のなびくかたにぞ花はちりける」(躬恒・一五八)等、風になびくもの、乱れるものとして詠まれるのに対して、当該歌は「乱れぬ」と逆の発想で詠む。「青柳の糸の細しさ春風に乱れぬい間に見せむ兎もがも」(万葉・卷一〇・一八五一 作者未詳)。〇いとど浪さへよればなりけり「いと」は「いと」と「糸」、「よる」は「寄る」と「繕る」の掛詞。「水底にかげのうつれる青柳は浪のよりける糸とこそみれ」(底本・七三二)。

〔通釈〕 柳

吹く風に乱れることのない岸辺の青柳は、枝の糸を浪までが寄ってますます繕るからなのだった。

七三番歌

水底みぞに影かげのうつれる青柳あざやなぎは波なみのよりける糸いととこそみれ

〔異同〕 〇詞書↓御屏風いけのほとりのやなき(西・前) 〇いと、こそみれ↓かけとこそみれ(西)、あはとこそみれ(歌)、あと、こそみれ(前)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 〇水底に影のうつれる 水面に映った影は水の底にあるものと詠まれた。「水底に影をうつせる菊の花波のをるにぞ色まさりける」(新勅撰・冬・三七八 醍醐天皇)。〇波のよりける 「より」は、「寄り」(波が寄る)と、「繕り」(糸を繕る)を掛け、「繕り」は「糸」の縁語となる。〇糸とこそみれ 青柳の枝を糸に見立てる。当時の類型的表現。「水のあやの乱るる池に青柳の糸の影さへ底に見えつつ」(貫之・五〇

二二)。

〔通釈〕

水底に影が映っている青柳は、波が寄って繕り合わせた糸と見えることだ。

〔補説〕 水に映る柳を詠む。当時の類型に則って柳の枝を糸に見立て、さらに「寄り」と「繕り」を掛けることによって、柳と波を言葉の上で関係づけた。中務の孫にあたる藤原光昭(中務の娘と一条摂政藤原伊尹との子)の歌に「池水に影うつしける青柳の糸をば波やわけてよるらむ」(光昭少将家歌合・四)があり、当該歌との影響関係が認められる。

七六番歌

卯うの花はな

卯の花の盛りにのみや山がつの垣根かきねをしるく人は見みるらむ

〔異同〕 〇詞書↓ナシ(西・歌・前) 〇山がつの↓やまさと(カツ)の(西) 〇垣根をしるく↓かきねもしるく(西)、かきねもしるく(歌)、かきほもしるく(前) 〇人はみる覽↓人の(も) みるらむ(西)、ひとのみるらむ(前)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 〇卯の花の盛りにのみや 「のみ」は限定。卯の花の盛りを取り立て限定する。〇山がつの垣根 「山がつ」は、山中に生活する獵師や木こりを指し、卑しく情趣を解せない人として詠まれた。「山がつと人はいへども郭公待つ初声は我のみぞ聞く」(拾遺・夏・一〇三 是則)。「山がつの垣根」「山がつの垣穂」などのようにその住まいの垣根

が詠まれることが多い。「あな恋し今も見てしが山がつの垣穂に咲ける大和撫子」(古今・恋四・六九五 よみ人しらず)。○しるく人は見らむ「しるく」は、はっきりしているさまをいうが、「白」と同源の語と見られており、卯の花の白さをも表わすか。「今宵より今日やちとせのゆきつまむしるくも空にいちじるきかな」(書陵部蔵(五一〇・一二二)能宣・一二二)。

〔通釈〕 卯の花

卯の花の盛りの時にだけ、山がつの垣根をはっきりと人は見るのだから。

〔補説〕 山がつの垣根に咲く卯の花を詠む。普段は目にとめることのない山がつの垣根だが、卯の花が真っ白に咲く時だけは人がはっきりと認識するのである。卯の花が山がつの垣根で白く咲くさまを詠んだ歌に「山がつの垣根に咲ける卯の花はたが白妙の衣かけしぞ」(拾遺・夏・九三 よみ人しらず)、「卯の花のさける垣根の山がつはまだ白雪の消えぬとや見る」(尊経閣文庫蔵元輔・六五)がある。当該歌の場合、「しるく」に同源の「白く」の意を重ねることによって、人目を引く卯の花の白さを表現したところに工夫が認められる。

七七番歌

道行く人、ほととぎすを聞く

行く道もはるけきものをほととぎす声に心のとまりぬるかな

〔異同〕 ○詞書↓道行人郭公きく(歌) ○はるけきものを↓はるけきとは(西)

〔他出〕 麗花・二八、元輔・二二三 初句「行く先も」

〔語釈〕 ○行く道もはるけきものを 「はるけき」は、これから行く道が非常に遠いさま。「君をのみいつはたと思ふ越なれば行ききの道ははるけからじを」(後撰・離別羈旅・一三三六 よみ人しらず)。○声に心のとまりぬるかな 「とまり」は、ほととぎすの声に魅せられ「心がとまる」意と、旅人が「立ち止まる」意を重ねる。「ふるさとはまだ遠けれどみぢ葉の色に心のとまりぬるかな」(後拾遺・秋下・三四五 藤原兼房)。

〔通釈〕 道行く人が、ほととぎすの声を聞いている

これから行く道もはるか遠いというのに、ほととぎすの声に心がとまり、立ち止まってしまった。

〔補説〕 ほととぎすの声に惹かれて立ち止まる旅人を詠む。ほととぎすの声に執着して足を止める旅人を詠んだ歌に「行きやらで山路くらしつほととぎすいま一声の聞かまほしさに」(拾遺・夏・一〇六 公忠)、「ほととぎす待つ一声のあかぬゆる越えくらしてむ今日の山道」(兼澄・一)などがある。当該歌の場合、「とまり」に「止まり」を重ねることによって、「行く」と対にしたところに表現上の工夫が認められる。

七九番歌

秋の野、花見る所

花の色に飽かぬ限りし帰らずは宿とも秋の野辺やなりなん

〔異同〕 詞書↓屏風のうたあきはなみる(前)、御屏風に、秋の、に花みるところ(西)、御屏風に秋の、はな見る(歌)、色の↓いろに(前)、

あきの↓あかきの(御)、のへや↓のやは(前)、なりなん↓なるらん(歌)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○花の色に飽かぬ限りし帰らずは 底本「花の色」を前田家本「花の色」と歌意により校訂した。花の美しさに飽き足りずにいつまでも帰らないでいたら。「花をしむところにて／かつ見つちとせのはるをくらすともいつかは花のいろにあくべき」(是則・四)。○宿とも秋の野辺やなりなん いつまでも花の美しさに満足することはないので離れられず、秋の野辺に宿ることになるだろうか、の意。

〔通釈〕 秋の野に花を見ているところ
花の美しさに満足しない限り帰らなければ、秋の野辺は私の宿になるだろうか。

八一 番歌

神楽

年ごとに神をぞ祈る榊葉の色もかはらであらんと思へば

〔異同〕 かぐら ↓ナシ(前)、としごとに↓年をへて(歌)、あらん↓をらん(西・前・歌)

〔他出〕 伊勢・八一、古今和歌六帖・第一・二二七(作者伊勢)

〔語釈〕 ○神楽 神に奉納する舞楽。狹義には、宮中で行われる御神楽。「十一月神楽／置く霜に色もかはらぬ榊葉に香をやは人のとめてきつらむ」(貫之・一九)。○榊葉 神事に用いる常緑樹の葉。神楽の楽人が舞の際に採物として持つもの。○色もかはらであらんと思へば 榊葉

の色が変わらないのと同様に、末永く変わることなくありたいの意。榊の普遍性を祝意として詠んだ。「霜八度置けども枯れせぬ榊葉の立ち栄ゆべき神の巫覡かも」(古今・神遊びの歌・一〇七五)

〔通釈〕 神楽

毎年毎年、神に祈ることです。榊葉の色が変わらないのと同様に、末永く変わることなくあつて欲しいと思うので。

〔補説〕 『中務集』の他本や『伊勢集』、また『古今六帖』の本文はどれも第五句が「をらんと思へば」である。その中で木船注釈や関根慶子氏『私家集全釈叢書 伊勢集全釈』(風間書房・平8)では、「をらん」は「折る」と「居る」の掛け詞であるとしている。しかし、そうすると「榊葉を折る」の意味が訳出しにくく、表現として効果的ではないため、底本のままで「あらん」の本文とした。

また、当該歌は『伊勢集』では「北の宮の御裳たてまつるに、かむのおとどの御送物の御屏風歌、ここにたてまつりたまふかぎり」と詞書された屏風歌の一首として収載されている。伊勢の歌が混入したと考えられる。歌の内容は北の宮への祝意を込めた歌であるため、当該歌の詞書は「神楽」のみであるが、そのように解釈した。

八二 番歌

若宮の御裳着を書き落としける

菅の根の長く思ひし春の日も花の辺りは暮れ易きかな

〔異同〕 なし(底本・御所本のみ所収歌)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○菅の根の長く 底本は「長し」。これでは歌意が取りにくい
ため「し」は「く」の誤字と見て「長く」に校訂した。「菅の根」は「長
く」に掛かる枕詞。「三月に人人ちるはなみる所／ちりぬべき花みると
きはすがのねのながきはる日もみじかりけり」(清正・九) ○花の辺
りは暮れ易きかな 日が長くなる春であるが、桜を愛でて時を忘れ、気
がつけばあつという間に暮れ方になっているという心境。「十月ばかり、
帥の宮より、いかにつれづれとのたまへれば／花見にとくらししときは
春の日ぞいとかくながき心ちやはせじ」(和泉・二二三)

〔通釈〕 若宮の御裳着に詠んだ歌で、書き落としたもの
長いと思っていた春の日も、花の咲いているあたりではすぐに暮れ
てしまうことだ。

八七番歌

又桜またから

山桜人知れねども清滝の底なる花や流れ出づらん観

〔異同〕 又さくら↓ナシ(西・歌)、人しれねとも↓人しらねとも(歌)、
きよたき↓きに滝(歌)、なかれいつ覽↓いてぬらん(西・歌)

〔他出〕 夫木・一二三七六

〔語釈〕 ○又桜 当該歌を含む八五番歌以降の七首は、藤原師輔の五十
賀に中宮安子が詠えた屏風のための歌と見られ、「又」は前の八四番歌
と同じ屏風の料であることを示す。他本では詞書がなく歌が並ぶ。「補
説」参照。○人知れねども 人に知られないけれど。底本及び西本願寺
本は、自動詞(ラ行下二段活用)の「知る」を用いるが、歌仙歌集本と

『夫木抄』は「知らねども」。「知れねども」の形は、当該歌の他に用例
を見出せないが、ここは底本に従っておく。○清滝 清滝川をいう。清
滝川は京都市西部の高雄付近を流れて保津川に合流する川で、古来から
白くたぎる溪流の美しさが詠まれた。「清滝の瀬々の白糸くりためて山
わけ衣おりて着ましを」(古今・雑上・九二五 神退法師)。○底なる花
ここは川底に映じている桜を言う。「二つこぬ春と思へど影みれば水底
にさへ花ぞ散りける」(貫之・二九八)。水底に映って見える桜を、散っ
て沈んだ花と見て、春は一年に一回しかないものを、散っているからに
は既に一度春があつたのだと気付いたという趣旨。

〔通釈〕 又、桜

山桜は咲いても人に知られないけれど、今ごろは清滝川の水底に盛
りの花影が映って水も一段と白くなり、それが流れ出していること
だろうか。

〔補説〕 八五番歌以降の屏風歌については、「中務集注釈(二二)」の八五
番歌の「語釈」と「補説」を参照されたい。

水底に映る花は、

延喜御時御屏風に、水のほとりに梅の花見たる所 貫之

梅の花まだ散らねどもゆく水の底にうつれる影ぞ見えける

(拾遺・春・二五)

のように、早春の梅花をはじめ、

清慎公家にて、池のほとりの桜の花をよみ侍りける 元輔

桜花底なる影ぞ惜しまる沈める人の春と思へば

(拾遺・雑春・一〇四八)

手もふれで惜しむかひなく藤の花底にうつれば浪ぞをりける

(拾遺・夏・八七 躬恒)

と、桜や藤、山吹等々、様々な花が詠まれる。

八八番歌

岸ちか近き松に懸かかれる藤ふぢなみ懸かかれり

岸ちか近き松に懸かかれる藤ふぢなみ波はは春はるのなごりに立たちとまらなん

〔異同〕 詞書↓ナシ(西・前・歌)、ちかき↓ちかく(前)、か、れる↓か、れり(前)、はるのなごりにたちとまらなん↓いくしほにかはいろまさるらん(前)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○松に懸かれる藤波 池などのほとりの松に藤の蔓がからみ、花房が垂れている様。「波」は「岸」の縁語。「岸近き松に懸かれる藤の花波さへおりて返すめるかな」(元真・五)。○春のなごりに立ちとまらなん 「なごり」は残余の意の「名残」に「余波」を重ねる。「立ちとまらなん」は立ち留まってほしい。「的ならで弓張りながらいる月は山の端にだに立ちとまらなん」(円融院御・二九)。当該歌の場合、「立つ」は「波」の縁語。風がやんでもしばらく余波が立つように、藤波も春の名残として咲き続けてほしい、の意。

〔通釈〕 岸近くの松に藤が懸かっている

岸近くの松に咲き懸かっている藤の花房は、過ぎ行く春のなごりとして立ち留まって咲き続けてほしい。

〔補説〕 『古今集』夏の巻頭歌、

わが宿の池の藤波咲きにけり山ほととぎすいつか来鳴かむ

(一三五 よみ人しらず)

以来、池のほとりの藤の花、とりわけ当該歌のように松が枝に藤の花房が咲き懸かっている景は、屏風絵として多かつたものとみえて、同工異曲の歌が多数見られる。その中で、

藤の花、松にかかれり

岸もなき松に懸かれる藤波は昔の春のなごりなるべし

(元輔・四)

は、当該歌と修辞の面では酷似しつつ、「岸もなき」とあって、池のほとりではない点が少し面白い。

なお、前田家本では、当該歌の下句は八九番歌の下句となっていて、八七・八九番歌にあたる歌を欠いている。

八九番歌

又

住吉すみよしの岸かの藤波ふぢなみ春はる深こくいくしほにかは色いろまさるらん

〔異同〕 又↓ナシ(西・歌)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○住吉 三〇番歌「語釈」参照。○春深く 晩春になっているの意。また「深く」は色の深さをも表し、「しほ(入)」及び「色」と縁語関係を作る。○いくしほにかは色まさるらん 「しほ」は、住吉の浜の海水の「潮」と、染色で染料に浸す度数を言う「入」とを掛ける。何回染料に浸して染めたことによって、こんなに濃い紫色になったのであるうか。

〔通釈〕 又

住吉の岸に咲く藤波は、春が深まり、何度染料に浸けてこのように花の紫色が濃くなっているのだろうか。

〔補説〕 当該歌の詞書の「又」は、同じ屏風の歌ということだけでなく、前歌の詞書の「岸近き藤波」をも承けているのである。当該歌の場合、松は詠まれていないが、岸近い場所を松で知られる住吉の海岸とし、そこに藤が咲いているという、従来よりもスケールの大きな藤波の景を詠んでいる。

「わが宿の池の藤波」と詠まれていた藤波が、海岸の景になる例として最も古いのは、延喜十三（九一三）年三月十三日の『亭子院歌合』における右方・兼行王の歌、

風ふけば思ほゆるかな住之江の岸の藤波いまや咲くらむ

（亭子院歌合・三二）

であり、これには、

左持

躬恒

かけてのみ見つつぞしのお紫にいくしほ染めし藤の花ぞも

（三三）

右

是則

水底にしづめる花の影みれば春の深くもなりにけるかな（三四）

の二首が続くが、実のところ中務は、この三首から表現を取り、当該歌として再構成したと言つてよいであろう。

当該歌は「海岸の藤波」詠としては古い例に属する。この屏風歌が求められた師輔五十賀は、天徳元（九五七）年四月二十二日のことだったが、当該歌の影響を感じさせる歌が「天徳内裏歌合」に見え、それは天徳四（九六〇）年三月三十日のことである。その歌は、右方の平兼盛の詠、

我行きて色見るばかり住吉の岸の藤波をりなつくしそ

（天徳内裏歌合・一九）

である。これ以後の「藤波」と「住吉」の組合せには、『相如集』の例が挙げられる。

枇杷殿にて、小弓の賭け物にせられたる

住吉の岸に咲くてふ藤ならで何をか春の末にかくべき（二五）

かへし

住吉の岸ならずとも藤浪の心を我にかけてみよかし（一六）

右の贈答では「住吉の藤波」は、例えとして知られたものになっていると言えよう。しかし、平安中期の歌では他には『重之女集』に一例見られるのみで、以後の例は、慈円の

家を出でてたづねきたれば目にぞたつ藤浪かかる住之江の松

（拾玉・一五六二）

をはじめ、平安末期以降の歌ばかりで、二十首程度が見られる。

九〇番歌

山吹

山吹ぶきの花のさかりは蛙かはづなく井手みでにや春はるもたちどまるらん覽

〔異同〕 はるも↓はるの（西）

〔他出〕 雲葉・春下・二三九、風雅・春下・二七二、歌枕名寄・八五〇

〔語釈〕 ○山吹の花のさかりは蛙なく、和歌に詠まれる晩春の景物として、川辺の山吹と蛙の取り合わせは『万葉集』以来の常套。「山吹の花の汀にほへばや沢に蛙の声聞こゆるん」（忠見・七八）。○井手 京都

府南部の地名。古来、山吹と蛙の名所として知られる。「蛙鳴く井手の山吹散りにけり花のさかりにあはましものを」(古今・春下・一二五よみ人しらず)。○春もたちどまらん 春を擬人化し、美しい山吹と蛙の鳴き声に心惹かれ、人々のみならず、過ぎ行く春すら立ち止まるだろうかと想像し、井手の美景を称賛する。

〔通釈〕 山吹

山吹の花のさかりには、蛙が鳴く井手に春も立ち止まるだろうか。

九二番歌

村上御時歌合右方にて

年としごとに來きつわが見る桜花ざくらかすみもいまはたちなくしそ

〔異同〕 なし(底本・御所本のみの所収歌)

〔他出〕 新千載・春下・一一四

〔語釈〕 ○村上御時歌合 天徳四年(九六〇)三月三十日、村上天皇が主催した歌合。判者は左大臣藤原実頼。左から藤原朝忠・大中臣能宣・壬生忠見他、また、右から平兼盛・藤原元真・中務他の歌が出詠された。規模、形式、和歌の全てに秀で、後の歌合の模範となった。○たちなくしそ 霞や霧、雲などに対して「美しい景物を覆い隠さないのでおくれ」と呼びかける詠みぶりは常套的。「香をとめて誰折らざらむ梅の花あやなし霞たちなくしそ」(躬恒・三〇三)、「千鳥鳴く佐保の川霧佐保山の紅葉ばかりは立ちなくしそ」(順・一六五)。

〔通釈〕 村上御時歌合に、右方から出詠した歌

毎年毎年、私が訪ね来ては見ている桜花を、霞も今は立ち隠さない

でおくれ。

九三番歌

夏衣なつぎもたちける今日けふは花桜ざくらかたみの色いろをぬぎやかふらん

〔異同〕 なし(底本・御所本のみの所収歌)

〔他出〕 袋草紙・三四八、金葉三・夏・九七

〔語釈〕 ○夏衣たちける 夏衣を裁って仕立てることに、「立夏」の意を重ねる。夏の更衣。○かたみの色 桜色に染めた衣服を、散ってしまつた桜の形見と見る表現。「桜色に衣は深く染めて着む花の散りなむ後のかたみに」(古今・春上・六六 紀有朋)。

〔通釈〕

夏衣を裁つ今日は、桜の形見の色の装束を脱ぎかえるのだろうか。

九六番歌

又、麗景殿れいけいでんの女御、中宮にたてまつり給給ふ雛ひいなの裳もに葦手あしでにて

白波にそひてぞ秋あきは立ち來くらし汀みぎはの葦あしもそよといふなり

〔異同〕 又↓ナシ(西・前・歌)、たてまつり給↓たてまつらせたまふ(前)、ひ、いなものにも↓あふきに(西) ひるなものぬに(前) ひ、なものに(歌)、そひて↓そひてそ(西・歌) そゐてそ(前)、あきは↓あきも(前) たちくらし↓立ぬらし(歌)、いふなり↓いはなん(歌)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○又、麗景殿の女御、中宮にたてまつり給ふ雛の裳に葦手にて

「又」は内容的に九五番を受ける。麗景殿の女御は村上天皇女御莊子内親王。中宮は村上天皇中宮安子。安子が行った雛遊びの際に、人形の裳に葦手書きして差し上げた歌。「中務集注釈(二)九五番「語釈」・「補説」を参照。○そひてぞ 底本は「そひて」。他本により「そひてぞ」に本文を校訂した。○立ち来らし 白波が立ち寄せることと、秋立を掛ける。「立ち来らし」を採ったが、「そひてぞ」とした場合、歌仙本の「立ちぬらし」が穏当か。○そよといふなり 「そよ」は葦の葉が風にそよぐ音と、「そよよ」と相づちを打つ意を掛ける。「我が恋は難波の葦のうらなれや浪のよるよるそよと聞きつつ」(信明・六)

〔通釈〕 また、麗景殿の女御が、中宮に差し上げなざる雛の裳に、葦手

書きで

立ち寄せてくる白波に添って秋はやってくるようです。風にそよぐ汀の葦の葉も「そよよ」と言っています。

〔補説〕 西本願寺本の詞書では「あふぎ」とあり、扇に葦手書きして送ったとある。風にそよぐ葦の音を詠み込んだ歌の内容からは「扇」の方が趣旨とも合う。

九七番歌

又

七夕の心や空に通ふらん今日たち渡る天の河霧

〔異同〕 又↓ナシ(西・前・歌)、かよふらん↓かよふらし(歌)

〔他出〕 なし

〔通釈〕 また

織女の牽牛に逢いたいという心が空に通じたのでしょうか。七夕の今日、天の川霧が一面に立ち渡っています。

〔補説〕 「七夕」は、織女を指す場合や、牽牛または両方を指す場合もある。当該歌では、「天の川霧立ち渡り彦星の梶の音聞こゆ夜の更け行けば」(万葉・巻十・二〇四四)などのように、天の川に霧が立ち渡るのは牽牛が舟を漕ぎだしたからだとする内容の歌が多くみられることから、織女と解釈した。

詞書の「又」は、前の九五・九六番歌を受けている。九五番歌の詞書には「村上御時、中宮の雛遊びに、七月七日、河原に女房車あり、州浜などして」とあり、七夕に行われた中宮の雛遊びの歌である。九五番から九七番まではこの雛遊びの折の歌と考えられる。

九八番歌

絵に書きたる荒れたる家に男来たり。時雨ふる

神無月空の時雨もふるさとに君たづね来る袖もかわかず

〔異同〕 詞書↓けふにあれたる所にしぐれふるをとききたり(西) 糸にあれたるところにしぐれふるをとききたり(前)、糸にあれたるいへにしぐれふるをとききたり(歌)、しぐれも↓しぐれは(前)、たつねくる↓たつねたる(前)、そてもかわかず↓そらもかはらず(前)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○神無月 陰暦十月 ○時雨もふるさと ふるさとの「ふる」に時雨も「降る」を掛ける。「ふるさと」は、かつて住んだところ、か

つて訪れたところの意。

〔通釈〕 絵に描かれている荒れている家に男がやって来た。時雨が降っている。

十月の空の時雨も降っている昔馴染の私の家に、あなたが訪ねて来てくださった。あなたは時雨に濡れ、私は喜びの涙に濡れて袖も乾きません。

〔補説〕 当該歌は一首の中で主語が変わるので、違和感があるが試みに解釈した。

当該歌のように、忘れられた荒れた家、時雨の中再び男が訪れるというシチュエーションは、『伊勢集』冒頭二首を思わせる。はじめの詞書は省略するが、恋仲であった男が、他の人の婿になってしまった後、久しぶりに送ってきた歌とそれに対する女の返歌である。

人住まず荒たる宿を来てみれば今ぞ木の葉は錦おりける（一）

女、いと心憂きものから、あはれにおぼえければ

涙さへ時雨にそへてふるさとは紅葉の色も濃さぞまされる（二）

『伊勢集』では、久々の男の訪れに嬉しさを感じるものの「紅葉の色も濃さぞまされる」と悲しみの涙で、紅葉の色もまさり嘆きが深くなることを詠んでいる。

これに対し、当該歌は時雨の中、久しぶりに男が訪ねてくれた喜びの涙を詠む点で、伊勢とは逆の発想で工夫している。

一〇〇番歌

人の家の前より川流れたり。馬引き留めたる男あり

いかでかは過ぎて行くらん川波のたちどまらるる宿の前より

〔異同〕 川なかれたり↓水なかれたる（西）たきなかれたる（歌）、馬引と、めたる↓ナシ（西）むまと、めたるところ（前）、おとこあり↓男ありけり（西）ナシ（前）、たちどまらるる↓たきとまらるる（歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○家の前より「より」は通過点の意か。○川波のたちどまらるる「たち」は「川波が立つ」意と、「立ち止まる」意の掛詞。

〔通釈〕 人の家の前を川が流れている。馬を引き留めている男がいる。

いったいどうやって過ぎ行くのでしょうか。川波だつて自然と立ち留まる家の前を。

〔補説〕 詞書から、馬を引き留めている男に、宿の主人が「ちよつと立ち寄つて欲しい」と軽い挨拶として詠み掛けている歌と解釈した。

一〇四番歌

漁りしけるところ

漁りしてかひありけりと思ふ身をうらみと侘ぶと人やみつらん

〔異同〕 あさりしける↓あさりしたる（西・前・歌）、かひありけり↓かひありと（前）、うらみとわぶと↓うらみてふると（西・歌）はまにたのみてくると（前）、みつらん↓みるらん（西・前・歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○漁りして 人が海辺で魚貝類や海藻を採ること。「潮のまにあさりするあまもおのが世世かひ有りとこそ思ふべらなれ」（後撰・恋

三・七五八 長谷雄。○かひありけり「かひ」は「甲斐」と「貝」を掛ける。「漁りする浦ものどかに波たてて今日はかひある心地こそすれ」（中務（資経本）・三一）。○うらみて 底本は「うらみと」。歌意がとりにくいため、他本により校訂した。「うらみ」は「浦見」と「恨み」を掛ける。

〔通釈〕 漁りをしていた所

生きている甲斐があると思うわが身であるが、恨んでつらく思っている人は見ているのだろうか。

一〇五番歌

身を捨てて底かづくともたくなは 栲縄をながくくる人あらじとおも こそ思ふ

〔異同〕 そらかづくとも↓そこかは今も（歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○そこかづくとも 底本は「そらかづくとも」。これでは解釈し難く、また「ら」と「こ」は字形が似ているため歌仙本の本文によって「そこ」と校訂した。海女が海の底に潜って貝や海藻をとること。○栲縄 海女が腰につけている命綱。「かづきするあまの栲縄うちはへてもの嘆かしく思ほゆるかな」（相模・五七九）。栲縄から「ながく」「繰る」の言葉を導く。「くる」は「繰る」と「来る」を掛ける。

〔通釈〕

自分が身を捨てて海の底に潜って漁りをして、栲縄を長く繰る人はいないように、私のもとに長く通って来る人はいまいと思う。

〔補説〕 当該歌は「身を捨ててそこかづくとも栲縄を」までが「ながく

を導く。歌意は私のもとに長く通ってくる人はいまいという女心を詠んだ歌。

高野 晴代（日本女子大学教授）

高野 瀬恵子（日本女子大学非常勤講師）

加藤 裕子（日本大学大学院博士課程後期単位取得満期退学）

森田 直美（日本女子大学非常勤講師）

斎藤由紀子（日本女子大学大学院博士課程後期単位取得満期退学）

曾和由記子（日本女子大学学術研究員）

寶槻たまき（日本女子大学大学院博士課程後期在学）